

Title	福岡市方言における文末詞バイとタイ
Author(s)	平川,公子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2008, 8, p. 116-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23226
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平川 公子

### 【キーワード】福岡市方言、モダリティ、文末詞、バイ、タイ

#### 【要旨】

本稿では福岡市方言における文末詞バイおよびタイについて以下の記述を行う。

- (a) バイ、タイはいずれも平叙文にのみ生起し(4.1)、ト、ゲナの後、ネ、ナの前の位置に 生起可能なモダリティ形式である(4.2)。
- (b) バイは、発話時において聞き手にとって新規である(と話し手が判断する)情報を提示する機能を持つ(5.1)。
- (c) タイは、発話時において聞き手にとって新規である(と話し手が判断する)情報を、自己の知識へ確認・照会した上で提示する機能を持つ(5.2.1)。
- (d) バイとタイに共通するのは「聞き手には発話時において当該情報が無い」とする話し手 の判断である (6.1)。
- (e) バイは発話時における新規情報を提示する以外の機能は持たないが、タイは提示する情報を話し手が自己の知識や記憶に照会・確認するという機能が付加されている (6.2)。 タイの様々な語用論的意味 (5.2.2) はこのために生じる。

#### 1. はじめに

福岡市を含む肥筑地方には当該方言を特徴づける文末詞バイ、タイが存在する。(以下、例文においては、理解の便を図るため、本稿では問題となる文末詞および標準日本語に訳しづらい方言形をカタカナで記し、他の部分は標準日本語訳で示す。「\*」は文法的に容認されないことを、「#」は運用的に不適切であることを、「?」は容認性が低い(「??」は容認性がさらに低い)ことを表す。)

- (1) 福岡市には路面電車はないバイ
- (2) 福岡市にあるのは地下鉄タイ
- (1)、(2) における文末詞バイとタイは(多少の意味的な違いを除けば)互いに置換可能である。
  - (3) 福岡市には路面電車はないタイ
  - (4) 福岡市にあるのは地下鉄バイ
- 一方、バイとタイは共起できない。
  - (5) \*福岡市には路面電車はないバイタイ
  - (6) \*福岡市にあるのは地下鉄タイバイ

以上の事実は、当該文末詞が同じ文法カテゴリに属し類似した機能を果たしていることを 示唆している。

しかしながら、バイとタイは常に置換可能というわけではない。

- (7) あっ、今日の先輩は髪を染めている {バイ/\*タイ}。かっこいい!
- (8) あっ、そう {\*バイ/タイ}。今日は木曜 {\*バイ/タイ}。忘れてた! これらの事実は、文末詞バイとタイにはそれぞれ異なる意味特性があり、話し手により場面に応じて使い分けられているということを示している。以上の事実を総合すると、バイ

面に応じて使い分けられているといっことを示している。以上の事実を総合すると、バイ とタイは類似の機能を果たしながらも、互いに異なる意味を有しているといえ、実際これ は、当該方言話者の持つバイとタイはセットをなすという意識によく合致する。

本稿では、福岡市方言における文末詞バイおよびタイを対象とし、主にその意味機能に ついて記述を行うことを目的とする。その際、バイとタイに共通した意味機能、並びに両 者の間で異なる意味機能を明らかにするよう留意する。

本稿では以下の主張を行う。1) バイは、話し手が聞き手の側には無いと判断する情報を聞き手に提示することをマークする形式である。2) タイは話し手が聞き手の側には無いと判断する情報を、自己の記憶、知識等に照らし合わせた上で提示することをマークする形式である。3) バイとタイは、当該形式がマークする命題は聞き手の側にはない、と話し手が判断したことを表す点で類似している。4) タイは、命題を自己の記憶や知識等に照らし合わせた上で聞き手に提示していることを表すが、バイにはそのような機能はなく、いわゆる新情報提示の機能のみである。

### 2. 使用データと本稿の構成

本稿における記述は筆者の作例と内省に基づく。筆者は1969年生まれ。8~16歳と19~24歳の間、福岡市(福岡部)に居住<sup>1)</sup>。その他の居住歴は出生地から順に、大分市(0歳)、熊本県阿蘇郡(現阿蘇市:0-1歳)、熊本市(1-3歳)、長崎市(3-5歳)、福岡県北九州市(5-8歳)、東京都渋谷区(16-19歳)、大阪府寝屋川市(24-31歳)、兵庫県西宮市(31-37歳)。現在、留学により1年間オーストラリア在住。父親は福岡市(福岡部)出身。母親は福岡県飯塚市出身。筆者には外住歴があるため、一部の用例は福岡市(博多部)出身である長谷川法世氏による、博多を舞台とした小説中の会話文から引用し、引用した旨を記す。なお、次節で挙げる福岡市方言を対象とした先行研究中における適格性・適切性判断および、用例のもたらす語用論的意味の解釈と、筆者の内省とが異なることはなかった。

本稿の構成は以下の通り。まず次節(3節)において、先行研究を概観する。4節では予

<sup>1)</sup> 福岡市は歓楽街中洲のある那珂川を挟んで西の福岡部と東の博多部に分かれる。厳密には「博 多」は博多部を指し、用いられる方言も多少異なるとされるが、現在は福岡市内において融合、 平準化が進んでいる。従って本稿では、福岡市域において用いられる方言をまとめて福岡市方 言とする。

備的分析としてバイおよびタイの文法的分布を確認し、5節で当該文末詞の意味機能を記述する。6節では前節までにおける意味記述の結果に基づいてバイとタイとの対照を行う。7節は結語である。

#### 3. 先行研究

文末詞バイおよびタイは当該方言を代表する方言形式として広く知られており、また、そうした特性ゆえにいまだ盛んに用いられているにもかかわらず、先行研究が非常に限られているのも特徴的である。当該文末詞を中心に扱った先行研究は、管見の限りでは、神部(1967)、坪内(1995、2001)しか見あたらない。これらの先行研究において、バイおよびタイの意味機能は以下のように記述されている<sup>2)</sup>。

#### (9) バイ

- a. 話者中心の判断の、一方的な「持ち出し訴え」を基本とする(神部 1967)
- b. S-領域に獲得した知識 P を、それがまだ存在しない H-領域に書き込む操作をしていることを示す<sup>3)</sup> (坪内 1995)

### (10) タイ

a. 客体認容の判断措定を基本とする

(神部 1967)

- b. タイ: S-領域内の知識 P と記憶・常識内の P'とをリンクさせているという 知識 P<sub>meta</sub> を H-領域に書き込む操作をしていることを示す (坪内 1995)
- c. 「タイ」が担っているのは「接続した文が表す事態の内容のみを提示する」、 つまり、「その他のことには一切言及しない」という単純な機能

(坪内 2001)

これらの記述のうち、坪内 (1995) は談話管理理論という特定の理論的枠組みに依拠している。坪内 (1995) において当該文末詞分析のために構築されたモデルは、談話における聞き手の存在を常に想定しているため、坪内自身が「[筆者注:バイが独り言のように用いられる] 例をも救うためには、かなりのモデルの改変が必要になる」と述べている(坪内 1995: 86)。タイに関しては、聞き手の新規情報と既得情報を提示する場合があるとしているが、6.1 節において議論するように、タイは新規情報を提示する際にしか用いられない。また、その後再びタイの記述を試みた坪内 (2001) においては、坪内 (1995) を修正し、大きく異なる主張を行っている。さらに、(9) および (10) に挙げたそれぞれの主張には、

<sup>2)</sup> この他に、当該文末詞を主たる対象としてはいないが、岡野(1991) にも「バイには主情性が強く、タイには話者が理の当然と認定したところを告知する語気がある」との記述がある。

<sup>3)</sup> 坪内 (1995) における用語の定義は以下の通り。(cf.談話管理理論:田窪 1989)

S-領域:話し手の意識世界における談話により活性化された話し手の知識領域

H-領域:話し手の意識世界における聞き手の知識領域

Pmeta:話し手が S-領域に持っている知識は、それと同じ内容が話し手の記憶・常識の中にも存在しているという、メタレベルの知識状態

一貫性や共通性が少ないことも特筆すべき点である。このような状況下において、当該方 言における文末詞バイとタイを記述することには少なからぬ意義があると思われる。

### 4. 予備的分析——バイ、タイの文法的分布

本節では、次節以降の意味機能記述に対する予備的分析として、文末詞バイとタイの文 法的分布をみる。具体的には、承接する文タイプ (4.1)、他の文末詞との共起関係 (4.2)、 文中での生起位置 (4.3) の順にみていく。

### 4.1. 承接する文タイプ

バイおよびタイの生起する文タイプは限られており、両者とも否定・肯定を問わず平叙 文にのみ生起する。

- (11) 九大の移転はもう始まっている {バイ/タイ}
- (12) 医学部のある病院地区は移転しない {バイ/タイ} 平叙文であれば、承接する述語の品詞は問わない。
  - (13) 西鉄バスならどこでも見かける {バイ/タイ} (動詞文)
  - (14) 祝い目出度と博多一本締めでお開き {バイ/タイ} (名詞文)
  - (15) 博多の冬は意外と寒い {バイ/タイ} (形容詞文)
  - (16) 夜の中洲はにぎやか {バイ/タイ} (形容動詞文)
- 平叙文以外の他の文タイプには生起しない。
  - (17) 今度の夏休みはいつ福岡に帰ってくる {\*バイ/\*タイ} ? (WH疑問文)
  - (18) ホークスって、去年は優勝した {\*バイ/\*タイ} ? (Yes-No 疑問文)
  - (19) 明日一緒に東公園にセミ取りに行こう {\*バイ/\*タイ} (勧誘文)
  - (20) よし、今度の正月は太宰府に初詣に行こう {\*バイ/\*タイ} (意志文)
  - (21) とんこつラーメンなんだから紅ショウガのせろ {\*バイ/\*タイ} (命令文)

#### 4.2. 他の文末詞類との共起関係

バイおよびタイは他の文末詞とも共起可能であるが、共起する文末詞には文タイプ同様制約がある。バイ、タイと共起可能な文末詞類はト(標準日本語の「の」に相当)、ゲナ(伝聞)、ネ、ナ<sup>4)</sup>である。

(22) 都市高速を使った方が天神には早く着くト {バイ/タイ}

(『走らんか!』:標準日本語訳と下線は筆者)

<sup>4)</sup> 当該方言の「ナ」は(特に老年層において)標準日本語の「な」とは異なる用いられ方をする。

<sup>(</sup>a) そらあ、どうしてな

<sup>(</sup>b) あんたがたでちゃ、娘さんな出戻ってきとうやない<u>な</u> (あんたの家だって、娘さんが出戻ってきているじゃないか)

- (23) 名菓ひよこは福岡のお菓子ゲナ {バイ/タイ}
- (24) 飲み慣れてない人に焼酎はきつい {バイ/タイ} ネ (一)
- (25) 亡くなったおばあさんにうり二つ {バイ/タイ} ナ (一)

一方、バイ、タイのいずれも共起できない文末詞はクサ<sup>5)</sup>、ヤン(標準日本語の「じゃないか」に相当)、ガ(未分析)、ヨである。

- (26) 九州場所の時期ならコートが要るクサ {\*バイ/\*タイ}
- (27) ほーら、福岡でも地震が起こるヤン {\*バイ/\*タイ}
- (28) ドームならナイター観戦も涼しいガ {\*バイ/\*タイ}
- (29) いくらなんでも、朝から競艇に行ってるわけない {\*バイ/\*タイ} ヨなお、バイ・タイのうち、いずれか片方のみが共起可能な文末詞は無い。

### 4.3. 文中における生起位置

前節までの観察のように、バイおよびタイは文中においてテンス・アスペクトより外側の領域に現れるが、この位置に生起する諸形式との関連においては、次のような位置を占める。

(29) 王監督は今年で勇退するゲナです {バイ/タイ} {ネ/ナ} このように、バイおよびタイは聞き手目当て性を持つモダリティ形式の生起位置に生じるが、4.1 節において観察したように、生起する文タイプが限られており、例えば、汎用性のある標準日本語のヨよりも狭い意味領域を担う形式であるといえる。

### 5. バイ、タイの意味機能

本節では、バイおよびタイの意味機能をバイ(5.1)、タイ(5.2)の順に記述する。

#### 5.1. バイ

バイは次のような文脈で典型的に用いられる形式である。

- (31) (今週の授業を休んだクラスメートにむかって) 華丸くん、大吉先生の授業、来週は休講バイ
- (32) (おつかいに出かける人にむかって、伝え忘れた内容を) 今日はゴマサバたくさん作るから、鯖は2尾バイ!
- (33) (始業のチャイム後も廊下で話し込んでいる生徒らのうち一人が) あっ、先生が来たバイ
- (34) (ニュースで試合結果を見て、隣室で試験勉強中の子どもにむかって) 今日はホークスは負けたバイ

<sup>5)</sup> クサの分析は坪内 (1998) を参照。

これらの文脈に共通しているのは、話者の提供する情報は聞き手が初めて接する情報である(と話者が判断している)という点である。これは、以下の文脈においてバイが生起できないことからもわかる。

- (35) (二人で同じケーキを食べながら) #これ美味しいバイ(ネ)
- (36) (注射を打たれて泣いている子どもにむかって) #注射は痛いバイ。でも泣かないで。ね
- (35) では話し手も聞き手も同じケーキを食べており、このケーキが美味しいことはお互いにすでにわかっていることである。(36) では、子どもはすでに注射を打たれた後であり、注射が痛いことは体験済みである。こうした場面においてバイを用いると、自分の提示する情報を聞き手が知らないと思っているかのように解釈され、状況にそぐわないのである。従ってこれらの例は、話し手が聞き手の初めて接する情報を提示する状況となるように文脈を調整すると、適切となる。
  - (37) (話し手は常連だが、聞き手は初めて入る店で、メニューを指さしながら) これ美味しいバイ
  - (38) (これから初めて注射を打つ子どもにむかって) 注射は痛いバイ。でもがんばって我慢しようね

このように、バイが「当該形式がマークする命題は聞き手にとって未知の情報である」 という話し手の判断に基づく形式であることは、バイが特に幼い子どもや赤ちゃんにむか ってよく用いられることにも表れる。次の例は祖母が赤ん坊の孫に話しかけている場面で ある。

- (39) まあまあ、転ぶばい
- (40) あんたに祖父ちゃんが人形ばやってこいていうけん、持ってきたとばい
- (41) ほうら、弁慶さん<u>ばい</u> (39-41:『走らんか!』下線は筆者) 聞き手が子どもや赤ちゃんである場合には、聞き手に大抵の知識や情報が無いと話し手が判断するのが普通であり、バイが多用されるのだと考えられる。

以上の分析からバイの意味機能をまとめると次のようになる。

(42) バイは、当該形式がマークする命題は聞き手の側にない情報である(と話し手が判断する)時に用いられる、新規情報提示形式である

### 5.2. タイ

先行研究も指摘するように、タイは、バイとは異なり、その使用場面が幅広く、語用論的意味も様々に派生するために、標準日本語に置き換える際にかなりの意訳を必要とする (坪内 2001)。本節ではこうしたタイの意味機能を記述するために、まず 5.2.1 において典型的用例における中心的意味機能について分析を行い、その結果に基づいて、続く 5.2.2 に

おいてタイがもたらす語用論的意味の説明を試みる。

## 5.2.1. タイの中心的意味機能

タイは以下のような場面において典型的に用いられる。

- (43) さっき話したやない。スタートの合図たい
- (44) ジェフ:なしてチケットが2枚ですとかいな 勲美:ガールフレンドの分たい、分かろうもん
- (45) 陽子: どこに行きよるとね。仕事は片付いたと

勲美:バッチリたい

(43-45:『走らんか!』下線は筆者)

これらの例にみられるように、典型的には、タイは提示する命題について「当たり前だ」「当然だ」という意識を話し手が持っている場合に用いられる。(43) では話し手は今さっき説明したばかりの内容だから、聞き手は知っていて当然と思っている。(44) の話し手は、(この場面では、話し手である勲美の弟が) チケットを 2 枚注文するといえば、それは当然デートのためだと聞き手も理解するはずだ、と思っている。(45) では、出かけようとしている話し手が、母親(=陽子) から仕事は終わったのかどうかを心配されて、当然きっちり終わっている、と答えている。

問題はこうした「当然性」の意味合いがなぜ表れるかであるが、これを本稿では、タイがマークする命題は、その内容を話し手が自己の記憶や知識に照らし合わせ、確認したことを示すためであると考える。例えば(43)においては、話し手が聞き手に対して今さっき説明した内容が、話し手の記憶として残っており、それとの照合が可能なために「もちろん今説明したばかりだから覚えているはずだ」という意味合いとなる。(44)では年頃の男の子がチケットを2枚注文する場合、1枚はガールフレンドのためだ、という経験や知識が話し手の側にあり、その知識と照合できたことを示すために「そのくらい簡単に察しがつく」というニュアンスを伝える。(45)において話し手は、母親を心配させないように、自分の仕事はちゃんと終わったという事態が記憶の中に格納されており、その情報と照合できるのだから大丈夫だ、と答えている。

こうした意味機能を持つと考えられるタイは、従って、話し手が当該命題について自己 の知識に照らして確認することができない場合や、自己の知識への照合作業を行う動機が 無い場合には生起できないと予測され、実際、生起は不可能である。

- (46) (母の外出先はどこかと父から尋ねられ) 知らない。さあ・・・。西鉄ストア {#タイ/ヤロウカ (=だろうか)}
- (47) (生まれて初めてフグを食べて、感激のあまり) わーっ、フグって美味しい {#タイ/@}!
- (46) では、話し手が母親の外出先を知らず、かつ行き先について全く見当もつかないので、タイは不自然となる。母親の行き先について照合すべき知識や記憶が話し手の側に無

いためである。(47) も同様に、話し手はフグの味を全く知らず、その場で初めて食べたために、フグの味について照合すべき知識や経験を持たない。また、あまりの美味しさに反射的に声を発したような場合には、照合作業をする余裕も無く、タイは生起しない。

一方、これら二つの例は話し手が自己の知識へ確認を行う文脈、具体的には話し手の側にある程度の予測や予断がある場合には適切となる。

- (48) (母の外出先を父から尋ねられ) 知らない。どうせまたタバコ屋のおばちゃんのところタイ
- (49) (生まれて初めてのフグを食べて) わーっ、噂どおり。フグってやっぱり美味しい(ッ)タイ
- (48) において、話し手は母親の行き先に関する予測について、今までの経験に基づいた 知識への確認作業を行っており、その結果おそらく間違い無い予測として行き先を提示し ている。(49) では、話し手はフグの味について事前に何らかの情報を得ており、実際の味 との照合作業を行っている。これらの例では「どうせ」や「やっぱり」といった副詞と共 起する方がより自然な発話となるが、この点も、話し手には何らかの事前知識や経験があ ることを示している。

以上の分析から、タイの意味機能は以下のようにまとめられる。

(50) タイは、話し手が聞き手に提供する情報を、話し手自身の知識に照らし合わせたことを示す形式である

#### 5.2.2. タイの語用論的意味

5.2 節冒頭において触れたように、タイには(バイとは異なり)様々な語用論的意味が生じる。これらの語用論的意味の中には、基本機能を発話の中で応用した結果として発話が聞き手に対して担う機能と、こうした使用が伝達する話し手の感情とがある。本節ではタイが帯びる語用論的意味を、これらの違いを区別しながら、網羅的ではないが分類し、前節におけるタイの基本的機能の観点から説明可能なことを確認する。

#### (a) <断言・主張>

タイの持つ、聞き手に提示する命題を自己の知識と照会・確認するという機能は、「これ で間違いないのだ」「自分はこう信じているのだ」という強い態度を示す際に用いられる。

- (51) 山笠のあるけん博多たい
- (銘菓「博多山笠」CM:下線は筆者)
- (52) だから俺はやってないッタイ
- (51) の話し手は「博多を代表・象徴するものは博多祇園山笠である」という知識を経験などから得ており、命題をこの知識と照合させた結果として示すことで、命題内容を(自分にとっては)間違いないものであることを伝えようとしている。(52) は例えば聞き手があまり信じてくれない、または何度も自分に確認してくる場合に用いられ、「自分はやっていないという明らかな事実や記憶がある」ということを、知識・記憶との照合という機能

を用いて強く訴えようとしている。わざわざ自己の知識や記憶と照合した上での提示であることから、命題の真実性に対する話し手の自信や (=51)、怒りや不満などの態度 (=52) を伴うことが多い。

また、「自分は、命題内容についてこれで間違いないと確認出来るぞ」ということを伝えるために、聞き手に対して最後通告を行うような突き放した態度を示す際に用いられることもある。

- (53) はいはい。気持ちは分かった。でも、もうこれで決まりタイ この例では、話し手は自分には「これで決まりだ」という認識があるのだ、ということを 改めて自己に照会したという形で伝えることによって、この認識は揺るがないのだ、とい う態度を表している。
  - (b) <説得・なだめ>

聞き手の意志や認識を変えようとする目的で、話し手が提示する命題内容の妥当性を担保する形式としてタイが用いられる。

- (54) まあ気にするな。たまには負けることもあるタイ
- (55) やめろ。どうせお前が言ったところで、何も変わらないトタイ これらの例では、話し手は「いつも勝ってばかりなどということはありえない(=54)」、「言ってみたところで、状況は変わらない(=55)」ということを、自己の経験などから確認したものとして聞き手に提示することで、聞き手の考えを変えようと試みている。

タイの持つ<説得>の語用論的意味は、話し手がタイを自分自身に対して用いる際に現れることも多い。この場合、自己の持っていたそれまでの認識と照らし合わせるので、「本当は自分は別の考えを持っていたのだが (=56)」といった、とりあえずの、あるいは、不承不承の納得や、「自分がもともと予測・想像していた事態とは違う (=57)」という意外性をともなう。

- (56) もうわかったよ。委員は俺がやるタイ。俺がやればいいんだろ
- (57) おお。よく出来てるタイ。お前、がんばったな
- (c) <気づき・思い出し>

発話の直前まで失念していた事柄が、実は話し手の記憶や知識に格納されていたものであることを、自己の知識や記憶に確認・照会がとれたものとして提示すると、「忘れていたけれど、実はそうだった」という思い出しの意味となる。

- (58) あ、そうタイ。今日は木曜タイ。忘れてた! (=8)
- (59) ああ、そうだった。あの人も宴会には来ていたタイ

上の 2 例はいずれも、独白の場面で用いられているとすることも可能で、その場合、タイを話し手自身にむかって使用していることになるが、聞き手のみに対して用いると「気づかせる・思い出させる」働きとなる。

(60) ほら、ここに小さいけど穴が空いてるでしょう?わかる?ここタイ

(61) ほら、この人、あなたの小学校の担任だった吉田先生タイ。覚えてる?話し手は「ここに穴が空いていること (=60)」、「この人は担任だった吉田先生であるということ (=61)」は自己の経験や記憶に照らし合わせることができる、ということをタイを用いて示し、聞き手の気づきや思い出しを促そうとしている。

#### (d) <事実提示>

タイによって表現される「命題内容は自己の知識や記憶に確認の取れたものだ」という 意味は上述の (a-c) のような顕著な感情を伴う語用論的意味を生む場合だけでなく、単な る返答や、単に話題を進行させていく際にも用いられる。

- (62) A:なんでこんなところに鉄アレイがあるの? B:おう。さっきまで俺が使っていたトタイ
- (63) A: ここは何ていう通り?B: ここ?ダンロップ・ストリートっていうトタイ
- (64) 私、きのう天神に行ったッタイ。そしたら偶然、先生に会ったッタイ。それでお茶でも飲もうっていうことになってから、・・・

これらは、タイの持つ「知識・記憶に確認や照会をとる」という機能を利用し、聞き手に対して確実で間違いのない情報を伝えているのだという話し手の態度を表現しようとしている。(62)では、Aに鉄アレイがある理由を尋ねられたBは、Aの不審に思う気持ちや不満に思う気持ちを和らげるために「自分が使っていたのだ」ということを間違いない事実として提示している。「自分が使っていたのだから気にするな」「自分が実際使っていたのだ。だから怒るな」という意味を伝えることができる。(63)では、通りの名前を質問してきた聞き手に対し、返答を確実な情報として伝えることで、聞き手の疑問に思う気持ちに対しても答えようとしている。(64)の話し手は「昨日の記憶」に照会しながら情報を提供していることをタイで表すことによって、情報の確実性や再現性を高めようとしている。

こうした<事実提示>の語用論的意味に関連して、坪内(1995)において坪内自身が直 観的な相違をうまく説明できないと述べた、≪前提構成≫と≪思い出し≫をみる。

- (65) 《前提構成》 私の友達でね、鼓のお稽古しよう人が居るとタイ。で、その人今東京タイ。でね・・・。
- (66) ≪思い出し≫

あ、そうタイ。お土産ば持ってきとったとタイ。 (坪内 1995: 89-90) まず (66) では、話し手である自分が土産を持ってきていたことを失念していたが、自己の記憶に照会して土産の存在を思い出したことをタイがマークしている。このとき、話し手自身が一時的に土産持参の記憶を失っているが、正しい記憶に照会した結果、訂正したことをタイは示している。(65) も「思い出し」と同じく自己の知識・記憶に問い合わせているが、ここでは (64) と同様に、自分が実際の経験により得た記憶から引き出しながら、

確かな情報として聞き手に提示していることを表わしている。(66) との違いは自己の知識体系や記憶内での操作であり、(66) では記憶への照会の結果、自己の記憶状態を正しいものへと書き直しているのに対し、(65) で行っているのは自己の記憶を引き出す作業のみである。自己の知識・記憶への問い合わせという点では同じ操作をマークしているが、問い合わせに伴う操作が異なることにより、表れる意味が異なってくるものと思われる。

### 6. バイとタイの対照

前節までの記述から導かれた「バイ=聞き手にとっての新規情報提示」、「タイ=自己の知識や記憶への確認または照合」という意味機能は、個々の用例を説明することは可能であるが、バイとタイはセットをなしている、という当該方言話者の直観を正しく捉えているとはいえない。そこで、本節ではバイとタイの意味機能について対照を行う。まず、6.1でバイとタイの共通点について議論し、6.2で両者の相違点について考察する。

### 6.1. バイとタイに共通する機能

5.1 節においてバイは、当該命題の表す情報が聞き手の側に無い(と話し手が判断する)時に用いられる、新規情報提示形式である(=42)と規定した。つまり、バイがマークする命題は聞き手にとっての新規情報でなければならない。タイについても、この「聞き手への新規情報提示」を基本的機能に含んでいるといえる。以下の例では、聞き手が全く知らない(しかも予断すら持たない)事柄を伝えるためにタイを用いている。

(67) 宗茂:誰からやったとや?

陽子:栄司ですたい

(68) 勲美:なんね、この人。どこの人?

陽子:アメリカから来とんしゃる留学生さんたい

(69) 宗茂:お前はなんごと、こげんとこにお邪魔しとるとや

汐:呼ばれて来とるっ<u>たい</u>

(『走らんか!』下線は筆者)

(67) は、陽子が電話で話していた相手は誰だったのかと、宗茂が尋ねている場面、(68) は勲美が、自宅に初対面の外国人がいることに驚いている場面、(69) は、飲み仲間と水たき料理屋に入った宗茂が、店内で高校生の息子である汐と出くわして驚いている場面である。いずれの場面においても、話し手は聞き手が全く知らない事柄をタイでマークしている。また、前節における(62-64)も同様に、聞き手が全く知らない情報にタイが用いられている例である。

一方、坪内 (1995) では、タイが聞き手の既得情報を提示する際にも用いられるとして、 次の例を挙げている。

(70) A: ごめん、私が悪かった。

B: そうタイ。あんたが悪いとタイ

- (71) 1967 年生まれやったら、・・・今年で28 になるとタイ
- (72) A: 真昼の大火事げな、人はおらんやったとかいな

B: あ、そうタイねえ

(坪内 1995:90)

これらの例も、実際は聞き手にとっての新規(であると話し手が判断する)情報の提示と して分析するのが妥当である。(70)では、A は自分が悪かったことを認めているにもかか わらず、B はなお A が悪いのだということを伝えている。ここには、話し手 B の「A には 自分が悪いということについて、(話し手が判断する)正当な程度の理解が存在しない」と いう思いがあると考えられる <sup>6</sup>。次の(71)の場面においては、聞き手が談話中の「1967 年生まれの人物」である場合、聞き手は当然自分の年齢を知っている。この例において話 し手は、対象となる1967年生まれの人物の年齢を、自己の持つ、計算に関する知識を用い て算出し、自己の知識体系に照らし合わせた結果としての、聞き手の年齢を提示している。 注意したいのは、この例における計算結果の提示先が、聞き手ではなくむしろ話し手自身 と考えられる点である。話し手は相手の生年はわかっても、その年齢を正確には知らなか ったが、生年を用いて自己の知識から年齢を算出することができた。その計算結果を自分 で確認しているのである。5.2.2 節における「気づき・思い出し」の意味に近いが、これは (71) が独り言としても用いることが可能であることからも確認される。この用例は、タ イがマークする命題を自分に対して提示しているという点で、次の(72)における用法に 近い。(72) では、聞き手による直前の発話を聞いた話し手は、それまで聞き手の言うよう な懸念を持っていなかったが、「日中は屋内で活動している人が居る」、「大火事には巻き込 まれる人が多い」といった知識に照らし合わせた上で、聞き手と同じ懸念を自分自身に対 して、提示しているところである。

バイにも同様に、一見すると聞き手の既得情報を提示しているかのように見える場合が ある。

- (73) (書類に間違った年号を記載している友人にむかって) ちょっと、今年は平成 20 年バイ。
- (74) (したたか酔っている友人にむかって) ほら、あんたの靴はこれバイ。
- (75) (姉のレポート用紙を、また拝借しようとしている弟にむかって、姉が) こら!それ私のバイ!使わないでって言ってるでしょう。

上の例はいずれも聞き手が、普段なら分かるはずの情報を一時的に失うか、または意図的 に考えないことにしており、このような場面に限っては、話し手はこれらの情報を「聞き

<sup>6)</sup> 坪内はこれらの例を聞き手の既得情報を提示する例としているが、「決して B だけの主張なのではなく、誰が考えても A が悪いのだということを伝えようとしているのだと言える (坪内 1995:96)」「A には P=『自分が悪い』ということがそこまで客観的、常識的な答だという認識が欠けているわけである (ibid.:96)」と述べている。

手にとっての新規情報」として提示してもよいのである。特に、(73)では聞き手には分かり切っているはずの情報を、改めて「新規情報」として提示することで、「まだ分かっていないのか」という話し手の強い怒りを伝える効果を生んでいる。

バイとタイに共通する機能に関する以上の議論は、次のような例からも補強される。まず、 バイとタイは聞き手に当該情報が無いと話し手が判断する場合に用いられるので、話し手 も聞き手も当該情報について知っていることが明らかな場合は、バイ、タイ共に用いるこ とができない。

### (76) (指導教官の部屋に入るとき)

失礼します。D2 の黒木です {#バイ/#タイ}

この例のような場面で、バイやタイを用いると、聞き手である指導教官が自分のことを知らないと話し手が判断したことになり、加えて、自分の名前や存在を教えてあげているかのような意味合いとなり、非常に失礼な表現となる。

しかし、聞き手が自分を識別出来ないかもしれないと思われる次のような例では、バイ、 タイともに生起可能である。

(77) (同窓会の連絡のために、久しぶりに当時の担任に電話をかけて) 覚えてますか?委員長の田中です {バイ/タイ}

この場合、仮に当時の担任が電話の声の主を識別できるとしても、バイまたはタイの生起 は、あくまでも話し手の「聞き手は自分を忘れているかもしれない」という判断によるの である。

一方で、先述の(70-72)や(73-75)のように、話し手が「聞き手には当該情報無し」と判断した場合でも、聞き手は実は情報を持っている場合がある。しかし、これらは聞き手の持つ情報が誤っている(と話し手が判断した)場合や、独話の対象である話し手自身が当該情報について正確に把握していないか、気づいていない場合であり、やはりタイやバイがマークする命題内容が、発話の時点では一時的にせよ欠けているのである。

#### 6.2. バイとタイの相違する機能

発話の時点における新規(と話し手が判断する)情報を提示する機能を共有するバイとタイであるが、5節での議論から、タイにはさらに、話し手が自己の知識や記憶に確認をとるという機能が付加されているといえる。実際に、聞き手にとっての新規情報を提示する場合でも、話し手にとっても同様に新規情報である、例えば、両者にとってのその場での新発見のような場合には、バイは生起できてもタイは生起できない。

- (78) あっ、今日の先輩は髪を染めている {バイ/\*タイ}。 かっこいい! (=7)
- (79) (始業のチャイム後も廊下で話し込んでいる生徒らのうち一人が) あっ、先生が来た {バイ/\*タイ} (=33)

話し手が自分自身に対して用いる独話のような場合には、同じその場での発見でも、話し

手の側に予想や予測が無い全くの新発見の場合と、失念していたことを思い出したり気づいたりした場合とで、バイとタイとが使い分けられる。

- (80) (準備に時間がかかりすぎ、時計を見ると出発予定より大幅に遅れている) おっ、こりゃいかん {バイ/\*タイ}
- (81) あっ、そう {\*バイ/タイ}。今日は木曜 {\*バイ/タイ}。忘れてた! (=8)
- (82) ああ、そうだった。あの人も宴会には来ていた {\*バイ/タイ} (=59)
- (80) に関して、発見時の緊急性や切迫性が高い場合にはバイすら用いられないが、悠長に構えているような場合にはバイの生起は問題ない。しかし、話し手に遅れている自覚が全く無い時には、タイは使用不可能である。(81) や (82) のような「気づき・思い出し」の場合に特徴的に現れる「そうタイ」は「そうバイ」と置換不可であるが、これは「そう」の生起が示すように、「そう」によって指示されるべき記憶や知識がすでに話し手の側にあるからと思われる。従って、「そう」で指示される内容が話し手の知識や記憶ではなく、話し手の外側の事物を指す場合には「そうバイ」が生起する。
  - (83) (親友A子のために、B子・C子が、A子の彼氏Dのことで説得している)

A:なんで私がDとつきあっちゃいけないのよ?

B:だって、Dは「本命はE子だ」って言ってたのよ

A: 5~?

C: そうバイ。B子の言う通りバイ

(83) では、彼氏Dの本心を知らないA子に対してB子が教えた彼氏の発言を、C子が「そう」で指示している。A子はこの発言を知らなかったので、A子に対する新情報の提示となり、バイが生起出来るのである。

最後に、5.2.2 節で挙げた「事実提示」の語用論的機能を担うタイも、バイとは置換しづらい。

(84) 私、きのう天神に行った {?? (ト) バイ/ッタイ}。そしたら偶然、先生に会った {?? (ト) バイ/ッタイ}。それでお茶でも飲もうっていうことになってから、・・・(=64)

この例において、話し手が提示している情報は聞き手にとっての新規情報であるが、バイを用いると、一つ一つのエピソードを新規情報として何度も提示することになる。これは聞き手にとって非常に負担がかかるために、バイの使用が避けられると説明される。一方、タイは、5.2.2 節でもみたように、その基本的機能が、聞き手に提示する情報の確実性や再現性を担保するために、ストラテジックに用いられているのである。

### 7. 結語

本稿では福岡市方言における文末詞バイおよびタイについての記述を行い、以下の結論 を得た。

- a) バイ、タイの統語的振る舞いは同じであり、いずれも平叙文にのみ生起し、承接する述語の品詞は問わない (4.1)。
- b) バイ、タイが共起可能な文末詞類はト、ゲナ、ネ、ナであり、共起出来ない文末詞はヤン、ガ、ヨである。またバイ、タイのいずれか一方が共起可能な文末詞は無い(4.2)。
- c) バイは発話時において、話し手が聞き手の側には無いと判断した情報を提示することをマークする (5.1)。
- d) タイは発話時において、話し手が聞き手の側には無いと判断した情報を自己の知識に照らした上で提示することをマークする (5.2)。

従って、

- e) バイとタイはどちらも、発話時において「この当該情報 (=命題) を聞き手は持っていない」と話し手が判断したという点で共通している (6.1) が、
- f) バイがこの「新規情報提示」機能しか備えていない一方で、タイはその機能に加えて「聞き手に提示する命題は話し手が自己の知識に対して確認・照会を行った」ことを表す点で異なっている (6.2)。

タイは命題の提示の仕方に関して、バイよりも複雑な操作を行う。タイの生起する発話 に特徴的にみられる多彩な意味合いは、この操作にともなう自己の知識や記憶状態への介 入の様相に応じて、表面に現れる語用論的意味が異なってくる点に求められるのである。

本稿では意味機能の分析においてイントネーションの相違を考慮しなかった。また、他の文末詞との共起関係の有無を説明する観点からの分析も(他の文末詞の多くが未分析である理由から)行わなかった。これらは今後の課題である。また、バイ、タイは肥筑地方で広く用いられる文末詞であるが、福岡市のようにタイを多用する地域もあれば、北九州市や大分のようにバイの使用が優勢な地域もある。これらの地域間における、同じ形式がどのような意味領域で用いられているかについての対照は、非常に興味深いと思われる。

#### 【参考文献】

- 岡野信子 (1991)「九州方言の各県別解説 福岡」九州方言学会編『九州方言の基礎的研究 改 訂版』風間書房
- 神部宏泰 (1967)「九州方言における文末詞『バイ』『タイ』について」『熊本女子大国語国文学論文集』5 (井上文雄、小林隆、大西拓一郎、篠崎晃一編 (1999)『日本列島方言叢書 24 九州方言考2』ゆまに書房 pp. 242-254 に再録)
- 田窪行則 (1989)「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 坪内佐智世 (1995)「福岡市博多方言の不変化詞タイ・バイの意味記述」『九大言語学研究室 報告』16
- ---- (1998)「福岡市博多方言の不変化詞『クサ』の用法と機能」『日本方言研究会 第 67

## 平川 公子

## 回研究発表会 発表原稿集』

---- (2001)「福岡市博多方言の終助詞「タイ」の多様性について」『福岡教育大学紀要』 50 第1分冊

## 【用例出典】

長谷川法世『走らんか!』 集英社 (1995)

ひらかわ きみこ (大阪大学大学院生)

taru3104@gmail.com